

発信中!

ウグイスの鳴き声がきこえ、タムシバの白い花が山々に彩りをそえはじめた4月。おどきな時期がやってきたね。



▷ パンフレットができました

芸北せどやま再生事業の取組や趣旨を、イラストなどを交え、わかりやすく解説したパンフレットが完成しました。せどやま市場開場初日に並んだ軽トラの存在感あふれる表紙にはじまり、地域通貨の使い方、各方面に向けてのメッセージなど、伝えたいことをぎゅっと凝縮した内容となっています。様々な場面で活用下さい。

▷ 新聞掲載されました

4月3日付の中国新聞に、近藤紘史氏のインタビュー記事が掲載されました。記者の方が「せどやま事業に興味を持たれ、取組みの事、その背景にある芸北の自然や暮らしにも触れられています。どうぞご覧下さい。(裏面に記事を添付しています)」

▷ しいたけ木も売れています

先日連絡が入り、山口県の方がしいたけ木100本をご購入下さいました。他にも大島市内や町外から注文が入り、リクエストですが、販売が進んでいます。木の受け入れから販売、事業の広報など、色々な方にお智慧をいただき、協力していただいています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



事業の説明のパンフレットが完成。みなさまのお手元にもお届けします。



木の断面は種類によって様々。少しずつ違いを教えてください。



次のシーズンに向けて、せんばぎの準備も着々と。ご注文お待ちしております!

出荷総量：15,966 kg

出荷者数：3人

発券数：96千石

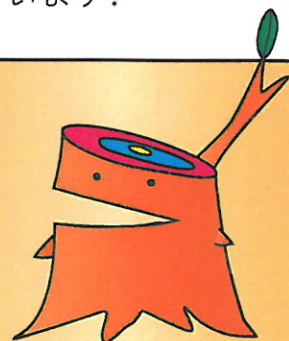
今月のNo.1：13,767 kg

来月の受入日(午前9時から午後3時半まで)

雪もなくなり、本格的にせどやま市場も開場します!木の日にお待ちしています。

4月は11日(木)・18日(木)・25(木)

上田耕史：080-6321-5826



オピニオン

田舎流の「合理化」探る

近藤紘史・西中国山地自然史研究会理事長



せどやま再生

「カネにならん」と見捨てられてきた背戸山(裏山)の落葉広葉樹を買い上げる試みが、広島県北広島町の芸北地区で始まった。引き換えに、地元店で使える地域通貨「せどやま券」を渡す。音頭取りは地元のNPO法人・西中国山地自然史研究会。近藤紘史理事長(左)に狙いを聞いた。(聞き手は論説委員・石丸賢、写真・天島智則)

一言葉は「せど」の木を出して晩酌を「だとか」。

軽トラもチェーンソーも、この辺りの家には大体そろっていますから、裏山の掃除がてら切った木を持ち込んでくれたら1ヶ当たり6千円で買い取ります、一杯やるくらいの小遣いになりませんか、という意味です。

高知の山で間伐材を買い上げ、地域通貨を渡している仕組みにそっくりで、キャッチフレーズもアレンジして使った。

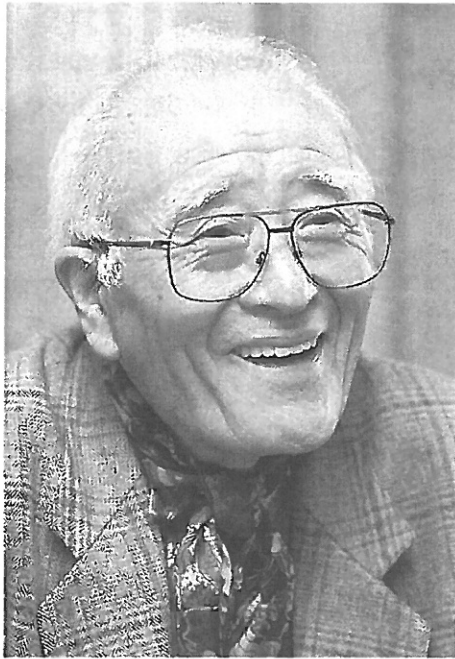
一実際、伍ペールや焼酎に化けてるよつですね。

昨年10月の初日には丸太を積んだ軽トラが列を成し、2カ月ほどで計70ヶが持ち込まれた。

地域通貨は地元の協力で商店や食堂、農機具の販売店、温泉、給油所などで使える。運転資金も広島県の補助で工面できた。

ボイラーの燃料や薪に加工すれば採算が取れる。3年の補助期間中に、集めた木の販路に見通しをつけるのが課題です。

「せどやま」というのは方



言ですか。

方言ではありませんが、最近ではあまり使われなくなりまして。高度成長の頃までは、子どもが大学に行くなら、せどにある樹齢100年ほどの杉を3本も切りやあ、入学金くらいにはなる。嫁入りさせるときはヒノキを30ヶ分くらいと、見当がついたものだった。

いのですが、人里と山との境目がやはり曖昧になりつつある。インシヤや猿、クマの出没が目立ちだしたのも、それが一つの理由。それに、ほげほげに木を切るからこそ日差しや風が入り、山野草が生え、昆虫や小動物がすみ環境も整う。生物多様性が保たれてきたんです。

一生物多様性が保たれるほど、人間社会も長持ちするとうろ考え方でした。

一今回は、針葉樹の間伐ではなく落葉広葉樹ですね。

「こらでは「マキ」と呼ぶナラです。杉やヒノキと違い、切り株から自然と芽が生えて20年くらいたてば元の林に戻る。たたら製鉄の時代から中国山地では、そうやって山に手を入れてきた。近ごろ問題視されている「ナラ枯れ」は、そんな生業のリズムを断ち切ったがためと思えてならないのです。

一確かに、裏山に竹やぶが迫る過疎地は珍しくありません。芸北では幸い、竹やぶこそな

取り戻したい。3・11の後、再生可能エネルギーに対する世の関心が高まっているせいも、まきストーブも普及し始めている。

「息をのむほど美しい棚田こそ守るべき国柄だと、安倍晋三首相は環太平洋連携協定(TPP)への参加表明でも言い切りましたね。

残念ながら棚田を守るという風潮は感じられません。農政は相変わらず大規模化、集約化が主流です。声高な「強い農業」も米国に負けるな、もっと合理化を」と無理強いしているように聞こえてならない。言葉の意味合いをはき違えている。

一どういことですか。

これだけ南北に長く、山野河海に富んだ日本列島なのに、一律の大規模化や集約化というところでいいのかどうか。それぞれ土地に合ったやり方がもつとあるはず。最近、こう思う。芸北を選んでくれて花が咲き、木々が育っているんだと。そう受け取れる風土がこの地にはある。個々人や地域が風土に合った生き方を考え直す、そんな田舎流の「合理化」を極めたいと思います。

こんど、こうし。加計高芸北分校を卒業し、4500名の町有林を持つ芸北町(現北広島町)の職員に。主に林務畑を歩き、01年まで雄鷹原診療所事務長。定年後は商店経営と農業の傍ら、町の観光協会会長を務める。動植物の研究者や愛好家をつくる西中国山地自然史研究会の会長も引き受け、NPO法人化に取り組んだ。

一高度成長以前の暮らしに戻ろう、ということですか。

そうではありません。都市中心の、行き過ぎた消費社会を正すためにも、里山暮らしのリズムをまず、私たち自身が